



機の銃爆撃とで橋も山路も爆破され、重い荷物を背負って谷川を渡り崖をよじ登って難行軍となる。幼い児童達に傷病者が出るのは必至、医薬品は用意して行くがきつと地獄の沙汰であろう。対策を考えては夜もろくに眠れなくなった。

私は母に事情を述べて、「神門にはいくらか知りべもあるから孫達三人を連れて一足先に疎開していたらどうでしょう。」と相談したところ、母は即座に「お前は生徒を守る責任があるから一しょに行きなさい。私はアメリカ兵が来たらきつと殺される。先祖のお墓の前で立派に死んで見せてやる。心配しなくていいよ。」と決然と言いはなった。

この一言で私の決意は益々固まった。先祖譲りの家宝「関の長船」細身ながら私の細腕には好適、目釘を固め下げ緒をしっかりと結んで、裏山の竹や椎の若木等試し切りを繰り返し、米軍上陸に備えた。

八月十五日、思いもかけなかった終戦となり、最悪の事態に至らなかったが、これが私の三十五歳の夏であった。

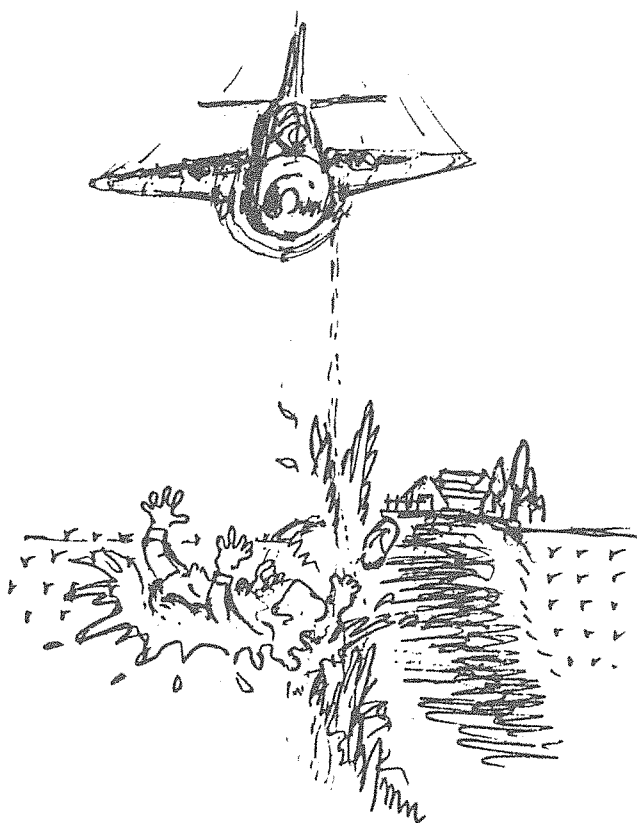
空襲

大工小路 奥村 ヤエ子

昭和二十年八月八日は何時になく晴れていて、とても気持ちの良い朝でした。

ラジオは、相変わらず戦況を知らせています。あわただしく朝じまいを済ませると家族の無事を祈りながら仕事に行きました。職場で、皆などと和気あいあいにお話をしている時、空襲のサイレンです。それ来たとはばかりに、子供達のことか心配になり近くの我家へ転ばんばかりにして走って帰りました。ちょうど家の前まで来た時、艦載機からの銃撃を受け、思わずたんぼの溝にうつ伏せになり難を逃れました。急いで家に駆け込んでみると、子供と祖母が泣きじゃくりながら私を待っていました。なぐさめる暇などなく、ただがむしゃらに子供を小脇にかかえ、祖母を引きずるようにして裏山へ避難させました。途端に近くの田圃たんぼに時限爆弾でも投下されたのでしょうか、身をつんざくばかりの音がしました。家族皆んなで口も聞けず黙ったままばかりと抱き合っ

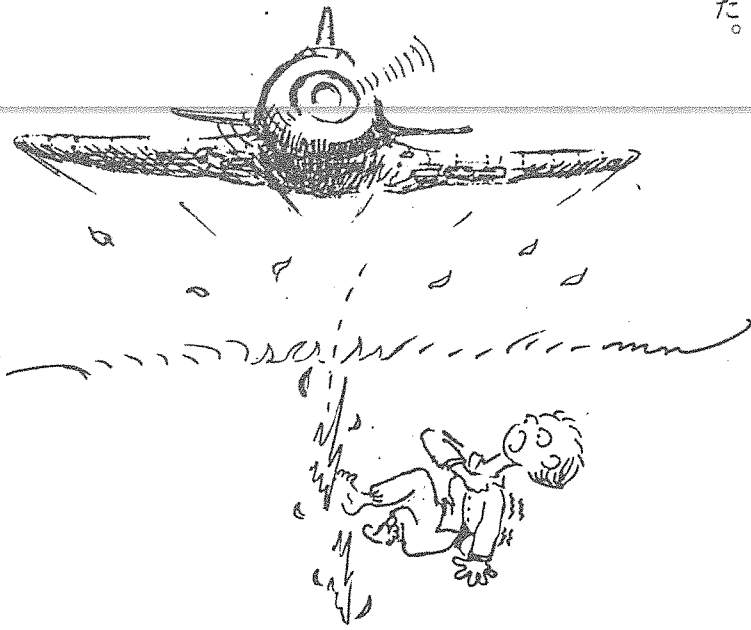
空襲警報が解除になるのを待ちました。解除になると、皆んなでほほをすり寄せ合い「良かった良かった」と、無事を喜び、ホッとしたものでした。



終戦直前の中尾

中尾 林 ツタエ

昭和十九年末ともなると戦争はいよいよ激しくなり、高鍋町にも戦死者が次々と遺骨となって帰ってくるようになりました。また、かなり年な人にも召集の赤紙が来ました。



国防婦人会でも、いざという時は敵と戦わなくてはいいけない。そこで在郷軍人に来てもらい、竹槍の訓練、気をつけ回れ右とみんな真剣でした。年なおばさん達は、くるっと廻って向いあわせになっている。おかしいが笑うこともできませんでした。そうしていると、空襲警報が鳴りだし、間もなくB 29が三機・六機・九機とかすり模様で飛んで来る。こうしたことが毎日の繰り返しで落ちついて農作業も出来ませんでした。

ある日のことです。空襲警報が鳴るとすぐ大きな爆音と共に敵機が低く飛んで来ました。と同時に私の目の前をうす赤い火玉が「ヒューッ」と音を立てて通り過ぎました。私は思わず座り込んでしまいました。

しかし、じっとしてはおられません。子供達二人が近くで遊んでいるのです。早く子供達を探し防空壕に入れないと、また敵機が来ます。私は夢中で畑を走り子供達の名を呼びました。百一部隊の方では大きな爆発音が続いて起こりました。そのうち、子供達は何もなかったように下の田んぼの畦道^{あぜみち}を帰って来ました。三歳と五歳なので恐ろしさがわかるはずありません。私は手

を引いて走りました。

昼間は余りわからなかったが、夜になると「ドカーン」と音をたててはドラム缶が爆発し、真昼の明るさでした。燃えてしまうまで何日もかかりました。

こんなことのあった何日か後のことです。私の家に軍の係官が来て父と相談がありました。「一か月余り家を貸して欲しい」とのこと、また、「アメリカ軍が南九州に上陸するらしい」との話が聞こえてきました。父は表の八畳二間を貸すことにしました。

その翌日からいろいろな品物がいっぱい運び込まれ、兵士の出入りが激しくなり大変なことになりました。お風呂は私の家の者と兵士が一日交代となったり、井戸さえをするなど、あわただしい日々が続きました。井戸水は遂に底をつき、炊事場は唐木戸の中央に湧水わきずの出る所があったのでそこへ行きました。

隊の本部は、唐木戸の山の中、今の公民館の近くでここに食糧倉庫等といっしょに建っていました。そして、近くの山には大砲の台座が作られようとしていました。

また、その周りには沢山の防空壕・横穴・たこつぼが堀

られて草木で覆っており、戦争も激しくなるなと思ったことでした。しかし、この砲座には大砲は座らず敗戦となっていました。

この軍隊が中尾に來たためにいろんなことがありました。井戸水に不自由したこともそうですが、こんなこともありました。

ある農家で幼児が庭で遊んでいて、焼灰やぐはいの中に顔を伏せてしまい火傷やけどをしてしまいました。当時は車もなく町まで行くのにもずい分時間がかかっていたので、子供の母親は困ってしまったのですが、ちょうど隊にいた軍医さんに手当てをしてもらい、顔が引きつることもなくきれいに治って大層感謝されました。

やがて、山の中に兵舎が出来たのでどの家からも兵士が引き揚げてからのことです。どの家でも「体がかゆい」と言い始めました。調べてみると白い大きなシラミがいました。兵士が風呂に入るときに落としていったもので、畳の縁などに卵が生みつけてあり大変でした。

本部や兵舎・倉庫等に電気を引くことにしていたらしく電柱がたくさん集められていました。終戦になると

「中尾のみなさんにはいろいろご迷惑をかけましたからこれで早く電気を引いて下さい」といって電柱をもらいました。そのために私達の村では早く電気が灯きました。夕方五時になると、裸電球だったけど明るくなりました。子供達は喜んで隣近所まで見て廻ったものです。夕方のランプ掃除も、石油入れもしなくてよくなり便利になりました。

戦争は田舎の中尾までいろいろな影響を及ぼしたのでした。

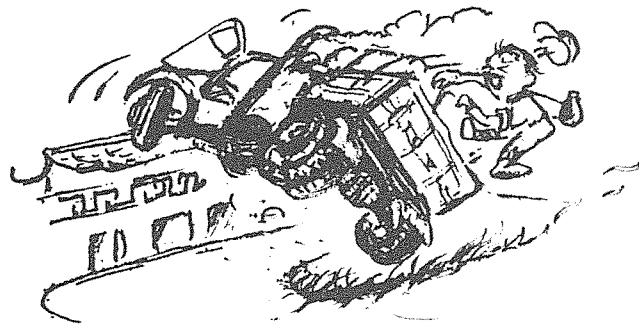
第四部 学生

拾ったいのち

東平原 瀬戸山 治 義

ハワイの真珠湾攻撃から太平洋戦争がぼつ発して半世紀が経過した。戦時中は「欲しがりません勝つまでは」を合言葉に、国家総動員体制に突入し、「君のため国のため」と老若男女すべてが何らかの形で戦いに傾注した。

学生・生徒は、学徒動員の名の下に学業を捨て、会社や工場で人手不足を補いながら生産活動に従事した。京城師範学校在学の私たちは、大型トラックの運転技術習得の講習を経て、軍事物資輸送の業務に携った。このころのトラックはガソリン不足のため、アセチレンガス、木炭ガス、アルコールなどの代用燃料を使い、馬力もなく性能も悪かった。思えば昭和二十年六月二十日のこと、漢江大橋から下り坂でかなりスピードの加わった車が、龍山駅前の四つ角を右折しようとしてハンドルを切ったところ見事横転し、荷台に乗っていた私は車の下敷きとなり、



近くの鉄道病院に運び込まれ、一命を取り止めることが出来たものの、頭部や胸部大打撲の重傷で、十日間は人事不省という大事故に遭遇した。その時運転していた同級生の金東薫（戦時中は創氏改名といって、日本式の姓

名命を強制する政策で金村東薫と呼んでいた）は、責任を感じてか退院する九月末まで一日置きには見舞に来てくれていた。一か月位して歩行出来るようになったが、頭部打撲が原因で右眼失明、左眼は外旋神経麻痺（斜視状態）胸部打撲が原因で上肢に力が入らず、バケツ一杯の水が持てない状態だった。幸い総合病院だったので、医師のすすめで、上肢のリハビリに電気治療、左右の眼球の白眼に注射を続けた。八月十五日、病院のベッドで戦争終結詔書の玉音放送や敗戦のニュースを、半信半疑で聞きながらぼう然となった。折しも、京城の上空を初めて見るB 29の飛行雲が目に入った。兵役にも就かず、空襲による死の恐怖もなかったが、動員先での半死半生の苦い思い出は、今考えても身の毛がよだつ。

九月末、病状もかなり回復したので、連絡もとれないまま父母の居る木浦へ帰省しようと、何回か京城駅へ足を運んだが、自警団（朝鮮人による治安維持組織）の日本人乗車拒否に遭い途方に暮れていた所、同級生李廣鎮（桂原光治）の計らいで裏口乗車することが出来た。金東薫といい李廣鎮といい終戦となっても、学友として寄

せてくれた友情には、今なお、感謝の念を忘れ難い。不規則なダイヤで南進する列車に、停車駅毎に棍棒を持った自警団員が乗り込み、日本人をチェックしていたが、たまたま隣席に満州から引揚げの子連れの朝鮮女性が、同じ引揚げ者同士だと座席の下に匿ってくれたので難を逃れることが出来た。木浦港では、終戦と同時にヤミ船をチャーターして、家財道具すべてを持ち帰った幸運な家族や、台風直撃で船が転覆し、全員海の藻屑となった悲惨な家族もあったが、我が家は父が官吏だったので、事務引継ぎが終るまで足留めされていた。十一月下旬一人千円の現金と、持てるだけの手荷物が許され引揚げが始まった。牛馬なみの貨物列車に押し込まれ、数日かかって釜山港に着いたが、倉庫や税関の軒下生活で食事や睡眠も満足にとれず、入浴も出来ない乗船までの一週間が長かった。十一月二十二日待望の乗船順番が来た。先ず、検疫や持物の検査を受けた後、約一キロメートルを重い荷物を担ぎ疲れ切った体に鞭打って、やっと棧橋に辿り着いたが、体力の限界と荷物を海に投げ捨てる人もいた。引揚げ船は貨物船改造の安寧丸（三千トン）

で、さまざまな思いを残し夜半釜山港を出帆した。荒波で名高い玄海灘を、船底に身動きも出来ない座ったままの姿勢で一夜明かした。翌朝、博多港に入港、九州本土に上陸し吉都線周りの列車で高鍋に向った。朝鮮育ちの私は、乗客の方言まじりの会話や、初めての車窓の風景を疲れも忘れて見とれていたが、烈しい台風のため吹き折られた孟宗竹の残骸がとくに印象に残っている。夜十時頃高鍋に着いた。駅付近の蚊口地区は、数回に亙る大空襲と台風の被害で廃墟と化していた。人影も見当たらない駅の片隅に家族四人残し、父は親戚宅へ荷車を借りに走った。死に物狂いで持ち帰った五人分の荷物は、荷車三分の一にも満たず、これが全財産かと情けなくて涙が出た。一先ず三世帯同居の伯母宅に落ち着くことが出来た。何日ぶりかの屋根の下で六畳一間に、五人雑魚寝の肩身の狭い間借生活が始まった。終戦によって、哀れな姿となって帰国した引揚げ者を、必ずしも暖かく迎えてくれる人達ばかりではなかった。馬屋の二階、鶏小屋の隣室、公民館の小部屋、物置同様の隠居屋など転々と渡り歩きながら、ことばし一灯のうす暗い生活が続き、

昭和二十六年、やっと東平原に永住の地を求めた。

終戦後は誰しもそれなりに衣食住に不自由をしていたが、引揚げ者の我々に匹敵する苦労はなかったのではなからうか。正しく「絶え難きを絶え、忍び難きを忍び」の連続だった。最も苦しかったのは生きるための食生活で、現在の飽食時代から考えれば、凡そ人間が食するものではなかった。食べ盛りの子を持つ親は、何とか子どもだけにはひもじい思いをさせまいと、竹の子生活をしながら食料の調達に走り食事の準備に頭を悩ましていた。代用食にもピンからキリまであり、残り物を炊き込んでの雑炊も時々ならば乙なものだが、明けても暮れても、塩汁に少量のデンプンをつなぎにした団子と野草を具に、米粒は数える程しか入っていない雑炊の汁を、鍋の底をのぞき家族の顔色をうかがいながらのお代り、親は子どもが終って残り汁を啜って済みますが、夜半には空腹で寝つかれず、水を飲み腹を満たしている後姿をしばしば見た。また、学童の弁当は固形物が必要なので、芋の周りに米粒の付いたカライモ飯や、おしんのダイコン飯などは良い方で、ヌカやふすま（小麦粉をひいた時

台湾での戦時下の学生生活

道具小路西 桑野敏郎

のかす)を混ぜた飯を、ふたを少し開け人目をばばかりながら隠れるようにして食べた掛け替えのない弁当だった。調味料の味噌や醤油は手に入らず、殆どが自家製の塩で、砂糖を使用した記憶もない。蛋白源は、田んぼや池沼での食用蛙や、タニシ、カラス貝、イナゴ採りが子どもの仕事だった。休日には家族全員で、稲刈り後の落穂拾い(夜、一升ビンで米搗き)芋掘り後の畑で屑芋拾い、遠足や遠出の帰途には、ノビル、ヨメナなどの野草を食料の足しにと、子どもながら何時も考え行動していた。「窮すれば通ず」で幾多の逆境、貧乏に追い詰められながら、家族が我慢し励まし合い、工夫し生き続けてきた。ある夜父がこっそり「こんな苦しいからには一家心中を」と本音で口走った時、十八才の私はここで負けてはならじと「死んで何になる」と阻止したこともあり、数年後の笑い話となった。

アメリカでは、真珠湾攻撃五十周年記念式典が行われ、リメンバー・パールハーバー(真珠湾を忘れるな)が叫ばれたが、私の心は今なお「生死をさまよったあの時の苦しみを忘れるな」である。

台湾総督府台北第一師範学校に入学したのは昭和十六年四月であった。当時台湾には師範学校が台北に二校、台中、台南、新竹、屏東にそれぞれ一校あった。

昭和十八年四月より学校制度が変わって、師範学校が昇格し、台北の二校は統合された。この昇格は教育の重要性が認識されたからである。戦争を勝ち抜くには教育によらなければならなかった。

台湾では、官吏も教職員も制服を着ていた。海軍将校のような服装であった。当時は剣はつらなかったが、以前には剣をつり、儀式などには判任官と奏任官は服装まで違っていた。

満州事変以後は教練も強化され、配属将校の勢力も増し、校長の教育方針に介入するだけでなく、ひどいになると教職員の思想を云々しかねない者もいたらしい。

戦争の激化は教練の強化だけではすまされなくなり、台湾学徒奉公隊が昭和十七年一月に発足した。学徒奉公

隊の隊長は校長、各隊の隊長は教職員、分隊長は生徒で、台北師範学校にも教職員、生徒を一体とした組織ができ、指揮系統も確立し、機動力も強化された。学徒奉公隊が州学徒奉公隊を組織し、隊長に州知事が当り、それらが台湾学徒奉仕隊を組織して隊長に総務長官が当った。

朝会を初め、あらゆる教育行事はこの組織によってやられるようになった。敬礼も軍隊と同様で、生徒は教師に対しては校外はもとより、校内でも挙手の敬礼をした。復唱復命もした。学徒はいつもゲートルをつけていた。文字通り決戦下の学校の様相を呈してきた。

戦争が激しくなると、前線と銃後、大人も子供も区別されない。生徒たちは空襲に備え、三角巾・ガーゼ・防空頭巾、その他の救急品を携え、地区別に整然と歩調をそろえて校門をくぐり、御真影奉安殿に対して最敬礼をする。始業前の清掃に続いて朝会が始まる。

全校朝会では宮城を遙拝し、護国の英霊に対して黙禱を捧げ、皇軍の武運長久を祈った。

校庭のいたるところに防空壕を掘ったが、全校生徒の分となると大変。業者にも依頼したようだが、大部分は



教師と生徒がせつせと土まみれになって作った。防空訓練、退避訓練、救護訓練、消火訓練も真剣にやった。号令もきびきびしていたし、復唱復命も忘れなかったし、敬礼も立派にできた。校庭やまわりの道路に「ヒマ」も植え、手入れにも余念がなかった。一日の課業が終わると、校庭や校舎をきれいに掃き清め、終礼をする。終礼には教室の正面の宮城の御写真に対して最敬礼をした。帰宅も集団で地区別に帰った。校門での礼は忘れなかった。

食物は極度に欠乏していたが、よく不自由に耐え、我慢し、しかも明るさと微笑をたたえていた。米は配給であつたし、時には試験的と称して米の代りにバナナが配給されることもあった。

敗戦の年の四月十日、私たちは学徒兵として、台北から宜蘭平野に移ることになった。ここは羅東から分れて濁水溪をのぼったところで、いわば宜蘭平野の要所であつた。所属は機関銃隊で隊長は宮崎市出身の老少尉であつた。営舎は発電所の水のあげ口の近くで、発電所関係の資材を入れる倉庫のような家屋であつた。

学徒隊といっても、装備は極めて悪かつたし、被服なども粗末なものであつた。たこつば堀りにあけくれ、爆薬がどれだけあるだろうか。機関銃はあっても実弾はどれだけあるだろうか。情けない話になってしまう。

空には連日米軍機がおとずれても、迎え撃つ友軍機もなく、台北市は連夜にわたってじゅうたん爆撃されていた。

勘といおうか、防空壕の中にと、戦いは終りかけているような気がしないではなかった。と同時に死の決意に迫られてもきた。

今まで歩んできた自分の道は、死のために用意されていたようにも思えた。

終戦の報を聞いて全くとまどつた。情勢判断もあやふやで、勝つたとは思わなかったが負けたかどうかははっきりしなかった。勝負なしの講和であつてくれればよいと、一縷の望みをかけるのに精一ぱいであつた。

わが青春の思い出

家床 河 辺 澄 子

第一話

○月○日 はれ

今日は登校したら皆大型トラックに乘せられてゆらゆらゆれて着いた所は新田原飛行場。何時も歩いてばかりなので遠足みたいにはしゃいで!!

降りて早速作業開始、飛行機のカモフラージュだった。小高い山を削って飛行機をすっぽりはめてその上に近くの山から切って来た木の枝等をのせる。こんな事をしてもすぐわかるのと思うけど命令だから仕方ない。みんな汗だくになって枝運びをした。

○月○日 くもり

朝空襲警報が鳴らない時は登校しなければならないので登校し、校門の前を掃除していたら突然敵機来襲。ポカンポカン爆弾を落しだした。ものすごい轟音にびっくりして友と二人あわてふためいて、どうして走ったかわからない。気が付いたら天満宮の防空壕へ入っていた。

それはすごい音で耳をふさぎ丸くなってふるえていた。暫くすると静かになったけど、もう外は火の地獄ではと思い恐るおそる出て見たら何のことはない。後でわかった事だけであっちこちの田んぼの真中の大きな穴が爆弾の跡だとわかった。

○月○日 はれのちくもり

学校から帰ってみると出征している従兄いとこが戦地へ行く前のひととき、休暇で帰っており、私を映画にさそいで来ていた。私は「学校で禁止されているから」と断るとひどく淋しそうにするので母のすすめもあり散歩だけにした。次の日早速上級生に呼出しをくった。私は「行かない」で通したけど。

その後幾日もせず従兄の戦死の報が届いた。

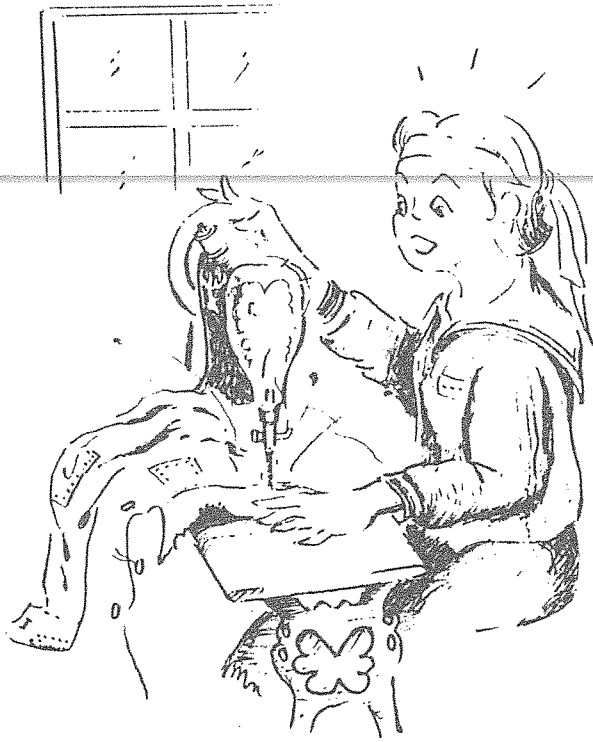
こんな事だったらランチにあっても行けば良かったと今更口惜しくてならない。

第二話

あれは太平洋戦争の終盤の少し前だったであろうか。私の通っていた県立高鍋高等女学校の校舎は、言わば内

地の野戦病院と化し、戦地？から送られてくる傷病兵の
病棟となった。

教室に毛布をしきその上にごろごろと寝かされ精気の
ない顔々。



私達は勉強どころではない。兵士達のシャツの繕いを
させられた。

白木綿のシャツのほころびにミシンをかけるとプチ
チと音がする。良くみると、卵、そしてうようよと虱で
はないか。声も出ず放り投げたが山の様な洗濯物を見る
と、これもお国の兵士のためと思い気持ちを押しこめて
プチプチ縫ってゆく。家へ帰ったら母が着ていた物みん
な脱がして熱湯をかけた。

朝礼の時である。その時の校舎は玄関から真っすぐ大
廊下が通っていて中央から運動場へ下りる様になってい
た。中央に指揮台があつて、それをさむように両側に
長く穴を掘って（足がまたげる位に）むしろで囲って便
所の代わりになっていた。

ある日私達は整列して先生のお話を聞いていた時の事
である。教室（病室）からよろよろと降りて来た兵士が
便所へ向かう時、足もとにたらたらと便がながれている
ではないか。「アッ」と息をのみ、皆顔を見合わせるだ
けで一言も出ない。当人は恥も外聞もなく、苦しみと痛
みに耐えて居られた。足洗い場で飯盒を洗いスコップで

御飯をすくっていた時代だから、今思えばあれは疫痢だったのではなからうか。

四十幾年も経つと、まぼろしのようなだが、今、目をつぶるといろいろ書き尽くせない程戦争の傷あとは残っている。

学徒動員

菖蒲池西 岩村 哲雄

学徒動員で生徒が学習を止めて工場等へ行き仕事するようになったのは昭和十九年の秋です。私共高鍋中学校は、四・五年生四クラスが八幡製鉄所（現北九州市）へ行き、それぞれの係へ配属され仕事をしたものです。

私は戸畑の沖台の旋盤せんばん工場で、初めて見る機械の操作から何とか飛行機のエンジンのボールベアリングが作れるようになるのに三か月かかりました。今思えば宮崎から来た機械科生でない、全く知識のない中学生に手とり足とり、それこそイロハから教えていただいた指導員の方々の御苦労は大変なものだったと察します。それ程までに戦争中の日本は人手が不足し、生産向上の必要があったのです。

八幡での動員作業中の思い出は沢山ありますが、私にとっては火の海の中を走り抜けた体験は忘れることができません。

八幡は製鉄所があり日本でも早く空襲を受けた所です。

昭和十九年アメリカは中国大陸の飛行場からB 29を飛び立たせ八幡の工場に爆弾を沢山落としました。しかしたいた被害もなく、民家に至っては私共が行った十月末には無傷の状態です。それこそ嵐の前の静けさで、市内には戦争にかりたてる幕が沢山かけてあったのを覚えています。例えば「欲しがりません勝つまでは」「一億一心火の玉だ」のような具合でした。

しかし、とうとう八幡市街地も焼夷弾がしかも真屋間に落とされ、またたく間に市内全域が火炎に包まれることになりました。八月九日のことです。

私は当時八幡製鉄本事務所の地下にある電話局の仕事に変わって、ちょうどその日は電話線の点検をしていました。空襲が激しくなり、焼夷弾が鉄筋で出来ている屋根にゴツンゴツンと当るのがわかり、外は大変だなと思いました。電話が通じている箇所を示すランプが次々に消えていくのを見ては、あそこも焼けている。こっちもだと悲しい思いでした。お陰様で私は鉄筋作りの電話局でしたので無傷でした。

アメリカのB 29の爆音がなくなるとみんな外へ飛

び出しました。そして周りの変わりように立ちすくんでしまったのです。

まず油と熱とで息苦しさを感じ、いろんな物の焼ける臭をじっとこらえました。空は真っ黒、見える範囲は全て猛々と赤い炎と黒煙とがうずを巻いています。その場に伏せました。

どのくらい経ったのかわかりませんが、沢山の従業員（女性が多かった）の方々が製鉄所の陸橋から我が家を指し、泣きわめく声で私ははっとしました。みんな「燃えている。私の家が燃えている。」と、地だんだ踏んで悲しんでいるのです。その姿は四十数年経ったいまでも瞳に焼きついていきます。火の海を眺めぼう然としていました。

その後三時間位して私達学徒は「自分の寮へ帰れ」ということになり、高鍋中の児玉君と私の二人はまだ燃えさかっている家々を横にみながら、走り始めました。電柱は倒れ燃えている。電車は焦げただれ、レールも敷石も熱くそれを避けながら走りました。山が迫っている所では、ゴーツという音と共に熱風が波のように次々に押

し寄せ、伏せている私達の上を通って行きます。作業着がもう燃え出すのではないかと波の来る旅に怖い思いをしました。何回となく火の波をやりすごし走り続けました。



八幡市内のほとんどに焼夷弾が落ちたので手のほどこしうはなく、消火するどころではなくただ燃えつきるのを持っしかありませんでした。油をまいて火をつけるのですから逃げのびられた人はよかったといえましょう。途中、馬が倒れ破れた腹から腸が数メートルも飛んでいた、防空壕から這い出している姿で黒こげになり死んでいる女性子供・やけどして鼻血を出しながら水道の水をやっと手ですくって飲んでいる人々、その姿を見ながら走らざるをえない私達でした。本当に何と表現してよいやら、むごい地獄絵図そのものでした。

こうして約十キロの道を難を避けては止まりまた走りを繰り返し三時間ぐらいかけて寮へ帰りつきました。無事に帰った喜びと疲れで玄関に座りこみ舎監の先生から水をもらってやっと我に帰ったものでした。

私達は帰るのが早い方で、それからみんなは帰ってきました。あれだけの空襲でしたが一人の死人も出ず、みんな揃ったのは幸いでした。

第五部 外地・引揚

恐かった船路

畑田 六車 ヒサエ

台北市の寿小学校に着任したのは昭和十七年の四月だった。校舎の玄関に土囊^{どふ}がうず高く積まれてあったのが印象的だった。つい最近まで多くの兵隊がここで暮していたと聞かされた。この学校にまる二年お世話になったが、この二年間は私の生涯を通じて思い出深いものとなった。戦争の最中^{さなか}に渡台し、見知らぬ土地で親友と二人の生活に親は心配のしどろしどろだったらしく、帰ってこいの一点ばり、とうとう帰郷することになった。その帰路のおもいでを当時の日記から拾い書きをしてみよう。昭和十九年のことになる。

四月三十日 雨

午前十時四十三分発の列車で台北を出発し基隆^{きいりん}に向かう。涙雨が降る。見送って下さった多くの方々の顔が自分の涙でぼやける。基隆について陸橋が開いたのが午

後一時半、橋を渡り船室に落ちつく。六人部屋だった。今日はこのまま基隆泊りだった。

五月一日も雨

船も出航しない。不気味な一日。

五月二日もまた雨、

どうなるのだろう不安がっているとやっと船が動き出した。ドラも鳴らず通報もなく海をみつめて確かめるだけだった。港を離れて暫くすると、見える見える、一隻、二隻とまたたく間に二十隻ぐらいの船が吾等の乗ってる船を囲んでくれた。船団を組むということだそうだ。先頭には駆逐艦がいて先導してくれているとのこと。水兵さんがいっぱい乗っておられる軍艦をみてすっかり安心した反面緊張感も倍加した。



五月三日 曇

船はゆっくり進んでいるようだ。「早く門司に着かぬか」とそのことばかりを念ずる。非常訓練があった。防具のつけ方が主である。昼間は友軍機がさかんに哨戒してくれる。これで万一のことがおこれば我が運命だと自分言いきかせる。

五月四日 晴

夕刻より霧が深くなり警笛がさかんに鳴りだした。寒くもなってきた。警笛は深夜になってますます激しくなった。最後の食べ納めなのかバナナが五本ずつ渡った。緊張した時が刻まれる。

五月六日 晴

突然耳をつんざく轟音！午前三時前だ。「やられたー」と寝台から飛び降り慌てて避難支度をし、隣の寝台でまだ寝ているおじさんを「警報が鳴っている、ほんものよ」とゆり起す。その間に友は甲板にかけ上り敵艦を確かに見たと恐れおののいていた。「甲板へ出るのではない」とどなられて避難場所に集合する。各船室から皆出てくる。この間ひっきりなしに大砲の音が響く。

が船は寸時も停船せず前進している。このあとは船員さんの指揮にすなおに従い行動する。突然また警笛が鳴った。慌てて皆して甲板に上る。「死んでも知らぬゾー」



と船員さんが大声でどなる。然しこの時ばかりは「ボートに乗って海に飛びこむんだ。私は泳げない。死ぬる」とおもしろいんだ。私だった。船員さんのどなり声にふっと気づいて甲板から部屋にかけ戻った。あとから考えると群衆心理による行動は船員さんにとっては迷惑そのものだったろう。三時半 四時 四時半 やっと空が白みはじめた。ああ助かった。船客一同皆してホッとしている。生と死の境の時間はすぎた。泣きたいような悦びだった。このあと皆して不寝番に立つ話、船員さんへの感謝の氣持のあらわし方等を協議した。朝食後甲板に上って周囲を見渡すと、水兵さんの乗っていた船が見えない、どうしたのだらう。あとで聞いた話によると、機雷があちこちに仕掛けてあったとか、勿論敵艦も近づいたのだらう、友が見たというのも本当だったらしい。

五月七日

門司に着くのは今夕か明日八日だろうと聞かされ今夜もまた心配だと思った。一難去ってまた一難。船は内地圈内にはいつているというものの安心できない。友と二人して歌いおさめになるかもと知っている歌を次々に

歌ったものだった。昨夜と同様の不安を感じた一夜だったが、明けて八日やっと門司港に着いた。「内地だ！門司だ！」と歓声があがった。



運命

松原町 中尾 シヅ子

私は、昭和十三年木城村から看護婦として満州の牡丹江満鉄病院に勤め、二年して掖河の国境守備隊の出入商と結婚しました。そして、娘も生まれて幸せな暮らしでしたが、これも長続きしませんでした。

夫は召集され、白内障の夫の父と、乳飲み子をかかえての苦労が始まりました。

昭和二十年八月九日、朝三時ごろスピーカーが「緊急事態だ!!日本人は避難の準備をせよ」と叫びます。私は目の見えない七十一歳の父と、三歳の娘の荷物のまとめを始めました。父は全く何も出来ず、私だけであわてているため準備ははかどらず、時間だけが過ぎていきました。

そうこうしているうち、日本軍の戦車の「ゴーツ・ゴーツ」という音で外に飛び出してみると、何ということか、トラックと戦車が通ってしまった後でした。避難する車に乗り遅れたと気付いたとき、私はヘナヘナとそ

の場に座り込んでしまいました。

戦車の最後尾が小さくなったとき、我にかえり、「いや、こうしてはおられない。ソ連が攻めてくる。父と娘を連れて逃げなくちゃ。牡丹江まで行けばどうにかなる。私がしっかりしなくては」と私は自分に言い聞かせました。

